

2月の行事報告 July 壮年会法座「御文章を味わう解説7回目報告」



【珠数章】(二帖第五通) 2月23日(木)午後3時

2月23日(木)午後3時より壮年会法座【御文章に学ぶ】が行われました。

ご住職は急なご用事があり、前住職より蓮如上人御文章・珠数章(二帖第五通)をご講義いただきました。本文の大意には、集まる念仏者は念珠持つ人少なく、仏を敬う心が欠けている。浄土往生のためには、念珠を持たなくとも、他力の信心一つで十分だが、仏を敬う気持ちを持つことが大事であり、それがおのずとふるまいにもあらわれる。

また、聴聞するありさまを 蓮如上人のお孫さんは「おどろかす かひこそなけれ村雀 耳なれぬれば 鳴子にぞのる」と読まれ、最初は驚いたスズメがやがて鳴子に乗っても驚かなくなるように、聴聞しても慣れきってしまって、全く身につけていないことがあるのではないかと。まず、初めてのこととして聞き、それも私一人のためであり、またこの

チャンスも今生最後として頂戴しないとイケないと言われてます。私たちが動物と違うのは「何故死ぬのだから、死んだらどこに行くのだから」と問いを持つことです。

「世間の隙(暇)を見てきくべきようにおもうこと、あさましきことなり」と蓮如上人は言われています。平生業生(死んでから極楽に行くのではなく、生きているいま、救われる)というように、信心により私たちは今、仏となることができるのですから、よくよく聴聞を心がけて大事にしてくださいと、前住職はご講義を結ばれました。

御文章解説の後に、領解文とその改訂版による「み教えについての消息」の説明があり、次第相承の善知識を、法灯を伝承された歴代宗主と変わったことなどについて、参加者の意見が交換されました。(越田 修二郎 記)



4月の行事報告 April 壮年会法座「御文章を味わう解説8回目報告」



【五重の義章】(二帖第十一通) 4月2日(日)午後1時半

蓮如上人は、親鸞聖人のみ教えに対する誤った見解に対し、その異議をただすために、正しい信心獲得のプロセスや獲得以後の相状を、「五重の義」(存覚 浄土見聞集)として示された。

①宿善があって②善知識に巡り会い③弥陀光明のはたらきによって④信心獲得の身となり⑤名号が信後の称名念仏として相続する。なお、①②③は④(信心正因)に到る縁由。⑤は称名報恩。

◆異議1.十劫安心

「十劫の昔に阿弥陀仏が成仏した時、既に衆生の往生も阿弥陀仏が定めて下されており、これを忘れないのが信心である」:「五重の義」として示された信心獲得に到る迄のプロセスや信後のあり方などを全く理解せず、理屈だけの捉え方をしている。自分の往生を決定づけるのは、他力の信心である道理を体得すること。

◆異議2.善知識だのみ

「弥陀に帰命する際、法を説いてくださる善知識がなければ何も出来ない。よって善知識だけを頼みにすればよく、善知識を帰依の対象にする」:善知識は、阿弥陀仏に帰命せよと伝える使い。「五重の義」の五つの要素が正しく機能するプロセスを体得すること。

◆信心と称名間の相続性に関する一考察

「五重の義」の④と⑤の関連性に注目し、あるべき浄土への仏道プロセスを、体得・対応性の視点から考察した。ケース1からケース2を経たプロセスとするのが妥当。

・ケース1: 称名により信心が相続されるプロセス(無明～金剛心までの仏道)

ひたすら称名念仏に励み、これをもって識心に届けられた仏種による覚醒を経て金剛心に到る。「わが弥陀は名を以て物を接したまふ。ここを以て耳に聞き口に誦するに、無辺の聖徳、識心に攬入す。永く仏種となりて、無上菩提を獲證す。」(資料 行巻P89)

・ケース2: 信心により称名が相続されるプロセス(金剛心～浄土までの仏道)

弥陀より頂いた溢れ出る真実信心に、感謝と報恩の気持ちで名号を称えずにはおられない心境。「かるがゆえに真実の一心、これを金剛の真心となづく、金剛の真心、これを真実の信心となづく。真実の信心は、かならず名号を具す。」(資料 信巻P168)

資料:教行信証(2001.1.16第3刷発行)親鸞著 金子大榮校訂(ワイド版岩波文庫75)岩波書店 (児島 佳守 記)

訃報のご案内

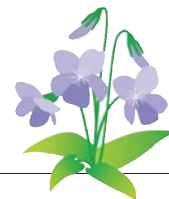
福島 佳行 様/令和5年2月23日に往生されました。謹んで哀悼の意を表します。

編集後記(壮年会だより: 令和5年6月「春夏号」会報)

今回は新会長の太田さんと前会長の盛田さんのご挨拶、また4名の方から原稿をいただきました。皆さまからのご意見やご希望をお待ちしています。

壮年会だより

令和5年6月「春夏号」 中原寺仏教壮年会だより Vol. 35



さしもの新型コロナウイルスもどうやら落ち着いてきたようです。壮年会法座におけるご住職の『御文章』講話も佳境に入ってきました。

お釈迦様も「最上の真理を見ないで百年生きるよりも、最上の真理を見て1日生きることのほうがすぐれている」『真理のことば』とおっしゃっています。壮年会行事には一人でも多くの方のご参加を!!

【住・職・閑・話】



3月29日より京都の西本願寺にて修行されていた、親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年慶讃法要が、5月21日ご満座を迎えました。

「立教開宗」とはあまり聞きなじみのない言葉と思いますが、親鸞聖人の主著であり、お念仏のみ教えをまとめられた浄土真宗の根本聖典、『顕浄土真実教行証文類(教行信証)』が成立されたことをいい、来年が成立より850年という節目の年となります。

50年ごとに慶讃(お祝いの)法要が営まれるのですが、あの大きなご本山の御影堂が全国から集まった参詣者でいっぱいになり、お念仏の声があふれる法要に、家族で参詣できたことは本当に有り難いご縁となりました。

また、本山とともに親鸞聖人のご誕生の地である法界寺にも参拝してきました。

天台宗の開祖である最澄が開山されたといわれるこちらのお寺は、平安後期の阿弥陀信仰の高まりや末法思想の普及にともない、阿弥陀堂が建てられました。

お堂の中央にご安置され、850年ほど前に親鸞聖人も手を合わされた阿弥陀如来坐像を前に、これまでにどれほど多くの方がこの如来像に救いを求め、また感謝のお念仏を称えてこられたのかを想像すると、グッと胸が熱くなるものを感じました。

西本願寺のホームページには、この度の法要は、「親鸞聖人の説き示して下さった浄土真宗の教えに出遇うことがなければ、今の私はあり得なかったという聖人への

感謝と、その教えに出遇えたことの喜びを込めて、聖人のご誕生を祝い、『立教開宗』に感謝する」法要と書かれています。しかし、「親鸞聖人のおかげでお念仏のみ教えに出遇うことができました、ありがとうございます」と、感謝の思いを伝えるだけでは、ただの誕生日会のお祝い終わってしまいます。

大切なことは、そのご生涯を通してお伝えくださった阿弥陀さまのお慈悲を聞かせていただき、お念仏申す人生を歩むことが、少しでも親鸞聖人のご恩に報いる生きかたといえるのではないのでしょうか。

親鸞聖人がおられた鎌倉時代と、現代とでは多くのことが様変わりしました。科学文明の飛躍的發展のなかで、平均寿命は延び、生活も便利になりました。

しかし、人間そのものの悩み苦しみが消えたからといえ、まったくそんなことはなく、自らの煩惱に苦しみ、煩惱に振り回されているのが私の姿です。

親鸞聖人は、時代や場所を超えて普遍的な真実を問い続け、その先に辿り着かれたことが「教行信証」に集約されています。



———
標題に込められた「顕真実」の姿勢に、今私たちが立ちかえることが、この度の法要の意義といえるのです。

息子は50年後も参拝できるかな?

境内清掃の奉仕 5月6日(土)10時~
晴天かつ強風の中、10時より壮年会有志5名で境内の清掃を実施しました。本堂の向拝、山門から石段、参道、聞法会館の入口等を洗浄機で隅々まで念を入れて清掃しました。次回は11月4日を予定、より多くのご参加をお願いします。

千葉組の総会に参加して 5月26日(金)13時半~
千葉組の総会が無事終わりました。共に歩むという馬場副住職の法話を聴聞する。宿縁につき教行信証から引用され、恩徳讃のハワイでの旋律化、また弟さんのハワイから160名率いての本山法要参拝などお話を聞きました。出席は30名、中原寺から4名が参加。懇親会には12名が参加しました。(越田 修二郎 記)